



いま解き明かす  
 浮世絵師 北斎、エロスの世界!

# THE HOKUSAI

## 北斎漫画

監督・脚本 新藤兼人

緒形 拳 乙羽 信子  
 田中 裕子 大村 崑  
 樋口可南子 殿山 泰司  
 西田 敏行 愛川 欽也  
 フランキー堺



製作 赤司学文  
 企画 中條宏行  
 企画 金井彰久  
 原作 矢代静一  
 撮影 丸山恵司  
 美術 重田重盛  
 音楽 林 光  
 時代考証 林 美一  
 製作協力 青年座映画放送  
 製作 松竹株式会社  
 配給 富士映画株式会社



# 解説

葛飾北斎は、幼名を鉄蔵と名乗っていたが、三十九歳で北斎成政と号した。

北斎は「富嶽三十六景」に代表される日本風景版画の創始者として、世界的な評価を得ている江戸時代後期の浮世絵師であるが、一方ですぐれた春画を描いている。

北斎の多くの春画のなかでもよく知られているものは、大蛸小蛸が浜辺で裸女を犯している奇怪な構図のもので、その大胆な天才的なイメージは、妖しいエロティシズムを放って見るものを揺さぶる。こうした発想は、人間北斎の体内にうごめくもの自然な表出で、蛸は、おそらく北斎自身の姿であろうと想像される。

映画「北斎漫画」は、自らを画狂人と称し、生涯、お直という女の微笑にふり廻され、またこの妖しい女を追い求めて春画を描きまくった北斎の、滑稽で型破り、そしてエネルギーッシュな裸の人生を描くものである。

彼は生涯、娘のお栄に面倒をみてもらうが、「里見八犬伝」を書いた滝沢馬琴とは、ふんけいの友であり、二人は魂のふかいところでは結ばれる。

なにごと計算しつくした馬琴が、生涯かかって女がわからず、めくらめつぼうに突っ走った北斎も、女の正体がかかめず、馬琴はあきらめ、北斎は未練を残して虚しく果てる。女とは、いつたいなにものか、北斎のけんらんたる春画は、彼自身がもたらした「性」のための息なのだ。

奇妙なことに北斎の娘お栄は、馬琴を愛しながらも七十過ぎては処女のまま生きていく。魔物としての女は、「お直」より、「お栄」の中にあつたのかも知れない。

監督は鬼才新藤兼人、この種の映画を描いては邦画界屈指の巨星であり、妖しいまでのエロティシズムを通して、画狂人北斎の謎に迫っている。新藤演出とわたり合う出演者は、

主演の北斎に、迫力ある演技の極致に迫る緒形拳、馬琴には「おんな太閤記」で人気絶頂の西田敏行、お直には意欲的な演技で飛躍を図る樋口可南子、そしてお栄には「ええじやないか」で出色の演技を見せた田中裕子。その他、フランキー堺、乙羽信子、六戸錠、大村崑、愛川欽也など異色話題キャストが顔を揃えている。

スタッフも撮影に丸山恵司、美術・重田重盛、照明・野田正博、時代考証・林美一、絵画指導・田中博之、装飾考証・荒川大などのエース級スタッフが取り組んでおり、今秋随一の異色話題大作である。

# 物語

鉄蔵(のちの北斎)は、娘お栄と二人暮らし。鉄蔵は35才、お栄は15才、女房はとうに死んでいる。二人暮らしといつても、父娘は左七(のちの馬琴)の家に居候になつてい。定収入のない鉄蔵は一家を構えていくだけの才覚がないのだ。家庭人でない鉄蔵は一家を構えていくだけの才覚がないのだ。佐七は養子の身である。侍の家に生まれた佐七だが、読本作者になりたいたいと秘かに志を抱いて、そのために武士の身分を捨てて下駄屋へ養子にはいりこんだのである。養子になつて食いつなぎ、いずれば読本作家として世に出たいと思つている。

佐七の女房お百は、まともな家庭人で、亭主が黄表紙などを隠し読んでいふことを知つていて、仕事に精をださないのはこのためだと、下駄屋が本など読む必要はないと口やかましい。お百が、なによりいまわしいのは、鉄蔵父娘が、いつまでも二階に居すわつていふことである。

鉄蔵は朝から晩まで絵などを描いてはぶらぶらしている。朝寝、昼寝、夜中にはつつき歩き、怪しげな女を引っぱりこむ。米を買う金もないくせに酒を呑む。それにも増して理解に苦しむのは、娘お栄である。そういう父に一言半句忠告するではなく、むしろ父の行状に拍手をおくる感じである。

鉄蔵は、貧しい半百姓の家に生まれたが、幼児、御用鏡磨師中島伊勢の養子になつた。しかし鉄蔵は六才にして巧みに絵を描き、伊勢もこれを認めて絵師の弟子にしたが、一向に尻が落ちつかない。あつちの師から破門になつたかと思うと、こつちの先生から愛想をつかさされる。

ある夜、鉄蔵は、お直というふしぎな女に出会う。ひと目見て鉄蔵はこの女のなかへのめりこんでいく。押しても引いても手ごたえがない、それなのに、強烈な見えないちからが絡みついてくる。もつて生まれた魔性なのか。鉄蔵はこの女にのめりこむことで自分が突き当つてい壁から脱出しようとするのだが、いくらのめりこんでも正体がかめぬのだ。この女は不思議な魔性を持つていた。

お直を父伊勢に提供することで、お直と離れることができ、また、金をせびることもできると、お直を伊勢の邸へ連れて行く。

伊勢は、これまた、一目でお直の魔性にとりつかれ、果ては、お直にきりきり舞いさせられて、首をくくつて死ぬ。そして、お直は、いなくなつた。

お直は、鉄蔵の胸の中でどんな働きをしたのか。鉄蔵は絵筆を捨て、唐辛子売りとなる。お栄も唐辛子売りとなつて父をさがして江戸の町をさまよう。お百が死ぬ。その間際に、どうか立派な読本作者になつてくれ、滝沢馬琴といふのは、重々しくして良い名だ、と言ひ残す。読本作家になりたいために、下駄屋の養子になつた自分の行為が恥しく思われた。お百の一言が深く胸を刺した。そして佐七は書きはじめ。胸の底のものがせきを切つたように奔流となる。書いたものがどどんと売れはじめ、たちまち滝沢馬琴として流行作家となる。

ある日、お栄が、ひよつこり、佐七の家を訪れる。いまは長屋の一室に居るお栄と鉄蔵である。お栄は、父にあなたが書いている読本の挿絵を描かしてくれ、と頼む。佐七は喜んでこれを引き受ける。お栄は、佐七に秘かな女心を抱いていた。しかしそれは、死ぬまで言うまいと固く心に誓つていた。

そして、北斎は89才となり、お栄は70才になり、馬琴は82才となる。

この長屋へ、お栄が、興奮して、お直と瓜二つの田舎娘を連れてくる。北斎は、思わず「お直ッ」と叫ぶ。北斎は時間の觀念がふつとんてしまひ、むらむらと青春の炎をかきたてられる。

一方馬琴は、もう目が見えなくなつていたが、お栄が今まで愛してくれてきた事をはじめ知つた。

北斎は、涙ながら「お栄に、佐七の嫁になつてやれ」と、追いたてる。

お栄と馬琴は、手をつないで出て行つた。

北斎は、お直を裸にする。お直は金のために何ごともしきる。絵筆をとつて一気に描きはじめたその絵は、巨大な蛸が、裸女に絡みつき、犯している図である。かくして、北斎の傑作「喜能会之故真通」の蛸と海女の性交の図は出来上つた。89才の北斎のなかに、お直の幻が現われて、一瞬、青春の情をかきたてたのである。

お直は金を受けると若い恋人と手に手をとつて出て行つてしまふ。北斎は独りになり、そして馬琴は死んで行つた。そして北斎も崩れた。お栄の頬に涙が流れた。その顔は、北斎の描いた赤富士のように、異様な、美しさと悲しみをたたえていた。

●特別鑑賞券1200円絶賛前売中／(当日一般1500大学1300のところ)

# 9月話題のロードショー

国電有楽町下車

# 丸の内ピカデリー (201) 2881